

歴史資料室だより

③

近藤喜則 史料展示室

今号からは、アルカディア文化館2階にある「近藤喜則史料展示室」を紹介していきます。

= 1 =



アルカディア文化館2階の展示室

喜則の人物像

郷土の偉人として知られる近藤喜則（1832—1901）は、江戸時代の末期、南部宿にあった本陣に嫡子として生まれ、父親世代の交流の広さを背景に幼少の頃から多くの識者からさまざまなことを学び、知識を深めました。20代後半には、西日本を3か月にわたって遊学し、見聞を広めるとともに、父に替わって

地元のみならず広域行政にも携わるなど活躍の幅を広げていきました。

37歳で迎えた明治維新後は、南部村や近隣9か村の初代戸長（区長）を務めた後、藤村紫朗県令に認められ、その腹心として県政発展に尽力。明治12年（1880）には第1回県議会議員選に当選し、48歳で初代県議会議長にも選ばれています。

そうしたなかで、特筆されるのが地域への熱い思いです。私塾の蒙軒学舎を設立して教育に力を入れたのははじめ、会社（殖産社）を興してミツマタの増産を奨励し、国との販路を確立。また、自らが幼少時に体が弱かったこともあり、住民の健康を思い、長男蒔太郎

（ふきたろう）らとともに病院設立に力を入れるなど、多方面で郷土の発展に大きな足跡を残しました。近藤喜則史料室では、こうした功績を、3つの情熱

時代背景

近藤喜則が生まれたのは、1832年。世代を見ると4歳上に西郷隆盛（1828年生まれ）、4歳下に坂本龍馬（1836年生まれ）がいます。

展示では、近藤喜則が生きた時代として、当時の南部宿をジオラマで再現しているのはじめ、天保6年（1835）に描かれた南部宿絵図、喜則が子どものころに教えを受けた石川益守による当時としては世界

として、「教育」、「殖産」、「札」などが展示されています。また、後世に木内三朗が記した「落穂拾遺（おちぼしゅうい）」も、読みやすい解説冊子として当時の暮らしぶりを伝えています。

このほか、喜則が大関として記され、県下での評判が分かる「峡中名々相撲番付」、没後、その業績を称え、井上馨が家額（てんがく）し、甲府市内に建てられた顕彰碑の碑文の写しも掲示されています

行政区分

明治時代、地域の行政区分はどうなっていたのでしょうか。

村、万沢村

その後、明治22年（1889）に町村制が施行され、富河村から万沢村が分村。長く4村の状態が続いたあと、昭和30年（1955年）の合併で南部町（睦合村、栄村）、富沢町（富河村、万沢村）の2町となり、さらに平成の大合併によって現在の南部町が誕生しました。

なお、明治初期には村の上に区があり、当地区は富士川を挟んで巨摩郡35区と八代郡16区となっていて、35区の初代区長は近藤喜則が37歳で務めています。

睦合村（中野村、成島村、本郷村、南部村、塩沢村、大和村）

栄村（内船村、井出村、十島村、上佐野村、下佐野村）

富河村（富士村、楮根

「峡中名々相撲番付」（明治4年3月）＝県立博物館蔵＝では、大関（最高位）に挙げられている（部分拡大）。

